

論 文 要 旨

| | | | |
|--|-------|-----|-------|
| 博士課程 ①・乙 | 第433号 | 氏 名 | 小村 浩史 |
| <p>[論文題名] Gender difference in relationship between body mass index and development of chronic kidney disease BMC Research Notes 2013,6:463</p> <p>[要 旨]</p> <p>[背景] 慢性腎臓病(CKD)は末期腎不全の危険因子であるのみでなく、心血管疾患、脳血管疾患の危険因子でもある。近年、CKD 対策の必要性が強調されており、CKD への発症進展を防ぐための疫学的対策が求められている。本研究では、地元自治体の一般住民を対象にCKD 発症と関連する因子を同定することを目的として、コホート研究にて検討した。</p> <p>[対象と方法] 平成11年度に宮崎県清武町の健康診断を受診した住民1876名を対象に、血清クレアチニン値と年齢をもとに日本腎臓学会推算式より推算糸球体濾過量(eGFR)を算出し、$eGFR < 60 \text{ ml/min/1.73m}^2$、または随時尿で蛋白尿$+1 (30 \text{ mg/dl})$以上をCKDと診断した。また、日本肥満学会の基準に基づきBody Mass Index (BMI) $\geq 25 \text{ kg/m}^2$を肥満とした。これらの対象者のうち、CKDを認めなかった住民1506名(男性473名、女性1033名、平均年齢58.2 ± 11.0歳)をその後10年間、毎年の健康診断受診時にCKD発症の有無について追跡調査した。</p> <p>[結果] 10年間の追跡期間中に、男性167名(35.3%)、女性299名(28.9%)がCKDを発症し、男性が有意に高頻度であった($P < 0.05$)。CKDを発症しなかった群とCKDを発症した群を比較すると、CKDを発症した男性女性ともに、年齢、収縮期血圧、血清クレアチニン値、BMIが高値であり、女性では肥満の頻度が高値であった。 Kaplan-Meier解析では、男性の肥満群と非肥満群のCKD発症に有意差はなかったが、女性の肥満群のCKD発症は、非肥満群と比較して高頻度であった($P < 0.01$)。CKD発症に関連する因子を、Cox比例ハザードモデルを用いて解析したところ、男性では、年齢と血清クレアチニン値($P < 0.01$)が有意な因子であり、女性では、年齢と血清クレアチニン値($P < 0.01$)に加えて、BMI($P < 0.05$)がCKD発症と有意に関連する因子であった。</p> <p>[結語] 今回の研究で対象とした一般住民において、女性のBMI高値はCKD発症に関連する因子であり、肥満とCKD発症との関連性における性差が示唆された。女性のCKD発症予防のための肥満対策の重要性が示唆された。</p> | | | |

備考 論文要旨は1,000字程度にまとめるものとする。